

第4節 古代富士郡域における宮添遺跡の役割

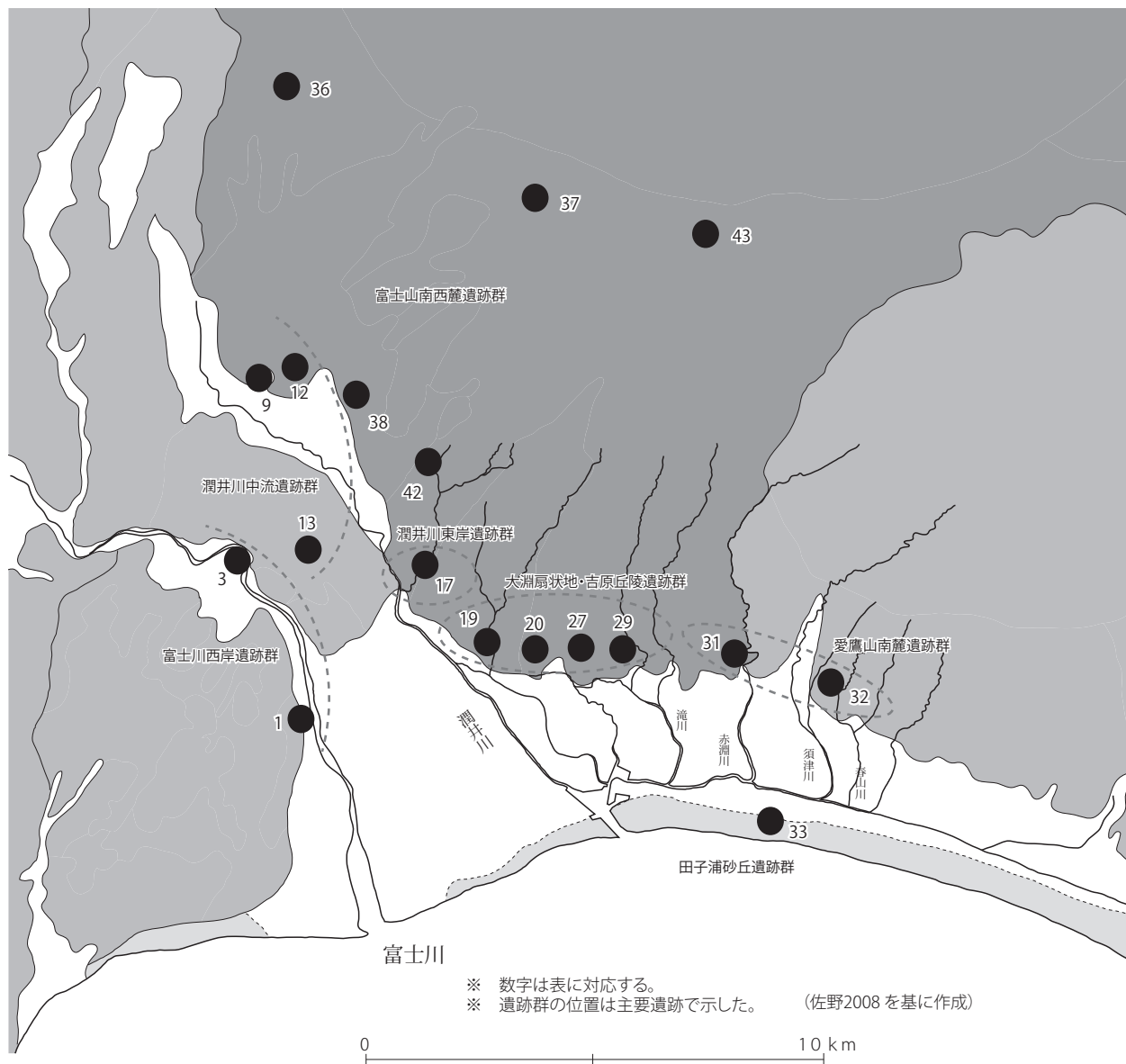
古代富士郡の二つの画期

第143図は古代富士郡の遺跡について、立地環境と分布から遺跡群として抽出したものである。第4表は各遺跡の時期的変遷を表にあらわしたもので、富士市と富士宮市内に43箇所の遺跡が確認されている。(佐野2008)。

今回報告する宮添遺跡は、祢宜ノ前遺跡とともに愛鷹山南麓遺跡群に属している。ここは古代富士郡のなかで最も東寄りの、駿河郡に接した地域である。

古代富士郡は大淵扇状地・吉原丘陵遺跡群に主要施設が置かれていた。明確な富士郡衙の遺構は未発見であるが、郡名「布自」墨書土器や、8世紀初頭～前葉と推定される

軒丸瓦を出土する三日市廃寺(富士市教委2001)もこの遺跡群に所在している。この遺跡群の繁栄する時期が7～9世紀代である。その後、10～11世紀には富士川西岸、愛鷹山南麓に遺跡が分散する。この地域は、古代富士郡域の東端と西端の交通の要衝に位置している。後者は古来より「根方街道」と呼ばれ、前者は富士川に面した河岸段丘上に位置する。この遺跡分布からも、律令制度による地域支配体制が崩壊し、地域の状況に応じた遺跡の成立と発展がみとれる。前代に栄えた大淵扇状地・吉原丘陵遺跡群においては、西端に中桁・中ノ坪遺跡が営まれるのみである。



第143図 古代富士郡と周辺遺跡分布

古代史上、10世紀は大きな画期といわれている。律令国家による国郡単位での地域支配が求心力をもって機能した時期が8～9世紀であり、後半の10～11世紀は、律令支配を脱して各地域で広域交易圏が成立し展開してゆく。この第4表からも大きな画期が読み取れる。

宮添遺跡の位置づけ

①宮添遺跡の年代

宮添遺跡は、弥生時代末から古代の集落遺跡である。遺跡の変遷には大きな三つのピークがある。弥生時代末から古墳時代前期（4～5世紀）、古墳時代後期（6世紀）、奈良時代後半～平安時代（8世紀後半～11世紀）である。

今回報告した宮添遺跡E地区においては、7世紀から8世紀前半期に該当する土器類はごくわずかの出土である。

8世紀前半の土器群は、東平遺跡に集中して認められ、他遺跡からの出土は、ごく少ない傾向が指摘されている。これは駿河国の政策として、東平遺跡集落への地域住民の集住が貫徹された結果という見解を過去に示したことがある（佐野 2008）。8世紀後半期から在来系譜の駿東型土器が多く認められ、灰釉陶器や清郷鍋、甲斐・信濃系譜の土器が流通し、宮添遺跡の集落が再び復活したと考えられる。

②外来系譜土器の意義

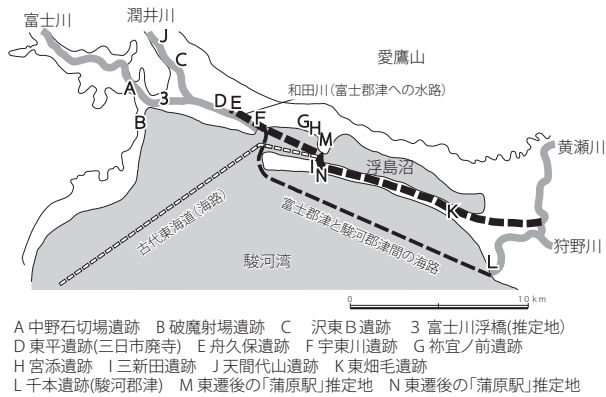
10～11世紀の古代後半期の最大の特徴は、外来系譜の土器群である（佐野 2010）。外来系譜土器の分布の意義は、中央集権国家による地域支配の破綻と、郡衙機能停止後の、地域の政治・文化・物流交易の再編の実態を反映するものと理解されることである。

本遺跡出土の外来系譜の土器は以下のように整理される。

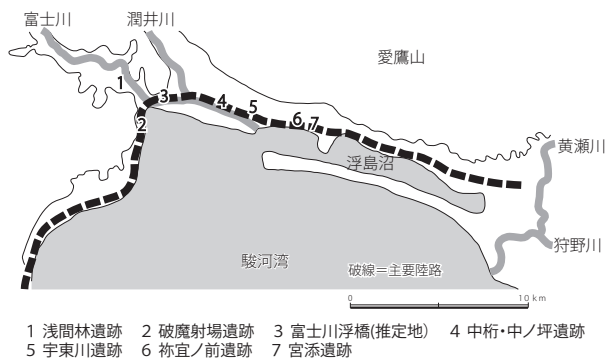
群	遺跡名	古墳前期	古墳中期	古墳後期	7C	8C	9C	10C	11C	12C
富士川西岸	1 破魔射場					■■■■				
	2 破魔射場					■■■■				
	3 浅間林					■■■■				
	4 浅間林					■■■■				
	5 中野					■■■■				
	6 中野沖田					■■■■				
	7 中野石切場					■■■■				
	8 (馬込地区)					■■■■				
潤井川中流	9 泉					■■■■				
	10 浅間大社					■■■■				
	11 浅間大社II					■■■■				
	12 元富士大宮司					■■■■				
	13 初田					■■■■				
潤井川東岸	14 沢東A地区2次					■■■■				
	15 沢東A地区3次					■■■■				
	16 沢東A地区4次					■■■■				
	17 沢東B					■■■■				
	18 中桁					■■■■				
大淵扇状地・吉原丘陵	19 中桁・中ノ坪					■■■■				
	20 東平第2・3地区					■■■■				
	21 東平第9地区					■■■■				
	22 東平第28地区					■■■■				
	23 西平1号墳					■■■■				
	24 東平第16・27地区					■■■■				
	25 東平第37地区					■■■■				
	26 滝下					■■■■				
	27 舟久保6丁目					■■■■				
	28 舟久保第33地区他					■■■■				
	29 宇東川ABC区					■■■■				
	30 宇東川L区					■■■■				
愛鷹山南麓	31 祢宜ノ前					■■■■				
	32 宮添					■■■■				
田子浦砂丘	33 三新田					■■■■				
	34 (大野新田)					■■■■				
	35 三新田D区					■■■■				
富士山南西麓	36 辻					■■■■				
	37 村山浅間					■■■■				
	38 木ノ行寺					■■■■				
	39 石敷					■■■■				
	40 上石敷					■■■■				
	41 権現					■■■■				
	42 天間代山					■■■■				
	43 岩倉B					■■■■				

佐野 2008 改変

第4表 古代富士郡と周辺遺跡の消長



第144図 古代後半(8～9世紀)の遺跡と交通路



第145図 古代後半(10～12世紀)の遺跡と交通路

信濃産——軟質須恵器 20・21 (SB3)、461 (包含層)
 ロクロ成形小型甕 98 (SB6)

甲斐産——坏 46 (SB10)、甕 206～209 (SB7)、鉢、
 65 (SB11)、羽釜 223 (SB19)

三河産——清郷鍋 265 (SB25)

これらの土器類のうち、甲斐・信濃国系譜と在来系譜土器のセット関係がもっとも良好に把握されるのが、富士市北松野(旧富士川町)浅間林遺跡である。

これらの分布範囲は、信濃系譜が主として東山道に、甲斐系譜の土器は、甲斐・信濃及び駿河国以東の東国に、清郷鍋は尾張～関東に至る東海道諸国に分布している(村上2003)。静岡県東部の駿河と伊豆国には、富士川と東海道の枝道である甲斐路を媒介として交易物流のルートが確立されていたと考えられる。古代富士郡は勿論、駿河郡や伊豆国での在来系譜及び外来系譜土器の検討から、古代後半期の交易物流の実態への追及が必要とされる。

453の柱状高台は、東海から関東地域に普遍的に分布し、その中心地域は判然としない。

③古代交通路との関連(延喜通宝の意義)

古代富士郡の交通路に関しては、蒲原駅の東遷(貞観6年・864)や、富士川浮橋設置(類聚三代格・承和2年(835)6

月29日条)の検討課題として、様々な研究が行われてきた(佐野2004)。宮添遺跡の役割について、古代交通路のあり方から検討を加えてみたい。

古代東海道のルートについては、当初の蒲原駅と、864年(三代実録、貞観6年12月10日条)の柏原駅廃止に伴う蒲原駅東遷後の比定地をめぐる様々な検討がされている。

筆者は、富士川下流域から沼津市西部に至る古代東海道ルートについて、835年富士川浮橋設置(類聚三代格・承和2年6月29日条)が海路から陸路への転換期であると考えた。それは律令国家による大きな交通路再編政策であり、その29年後に柏原駅廃止・蒲原駅東遷が実施されている。筆者は、当初の蒲原駅を駿河国富士郡の東平遺跡に、東遷後は二つの候補を示した。一つは、三新田遺跡周辺と考えた。これは水駅の柏原駅を陸路対応の駅に変更し蒲原駅としたもの。一方では、愛鷹山南麓のルートとして根方街道に位置する須津地区を考えた。富士市史において、中野國男は船津に比定している(中野1969)。

第4表と第143図からみて、古代富士郡と駿河郡西部における古代後半期10～12世紀の交通路は陸路優位と考えたい。具体的には、田子浦砂丘から沼津市千本海岸に至る海沿いのルートは古代前半期(第144図)に機能し、後半期には愛鷹山南麓ルートの通称根方街道が主要ルート(第145図)に転換したということである。このことは、古代前半期で終息する沼津市東畑毛遺跡の消長をみても明らかである。この遺跡は、黒笹14号窯式期の灰釉陶器を多量出土し、古代交通路に接した主要遺跡として注目されていた。

「延喜通宝」の出土する静岡県内の遺跡は、島田市居倉遺跡3点と、本遺跡1点で二遺跡4例目となる。これは延喜7年(907)に鋳造されたもので、本稿において検討対象とするⅢ期の古代後半期に該当している。

古代銭貨の出土は地域の主要遺跡とか官衙関連施設といわれてきた。古代後半期においては、むしろ交通路沿いの遺跡からの出土が注目されている。岩名健太郎氏によると、古代銭貨が官衙関連遺跡で集中して出土する傾向はみられないという。これらの背景としては「蓄銭叙位令」による銭貨の回収が行われた結果との方角もあるという。しかし、東日本においてはこの限りではない。

宮添遺跡は、古代後半期の10～12世紀、富士川地区の破魔射場遺跡、大淵・吉原丘陵遺跡群の中桁・中ノ坪遺跡とともに地域の物流交易を担った拠点であった。古代道

の海路から陸路への再編により、これらの三つの遺跡が交易物流を担う拠点として成立したと思われる。

破魔射場・浅間林遺跡は、東海地域及び富士川をルートとする信濃・甲斐との物流・交易拠点として、中桁遺跡は富士郡の中枢に位置し、現在の富士宮市も含む富士郡域の物流を担う拠点として、さらに宮添遺跡は、広大な浮島沼を挟み柏原・元吉原地区を含む富士郡東部と駿河郡西部を対象とする物流の拠点として機能していた集落と推定される。これらは、王朝国家期にあって政治的な背景から成立したものではなく、地域の交通体系及び立地条件から選択された結果成立した集落であろう。しかし、遺構は竪穴住居が主体であり、物品管理等を司る倉庫群等と推定されるものは皆無である。今後の調査に期待するとともに、発見されている遺構の再評価にも取り組む必要がある。

(佐野五十三)

参考文献

- 佐野五十三 2004「富士川下流域における古代交通路の素描」『設立20周年記念論文集』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
 佐野五十三 2008「駿河国富士郡における8世紀代の移住と集住」『静岡県考古学研究』40 静岡県考古学会
 佐野五十三 2010「富士川下流域から出土する古代土器系譜について」『静岡県考古学研究』41・42 合併号 静岡県考古学会
 中野国男 1969「第二章三節 駅制と交通路」『富士市史・上巻』富士市
 村上吉正 2003「甕からみた遠隔地間交流—古代東国における外来系土師器甕の検討」『神奈川考古』第39号神奈川考古同人会

報告書

- 富士市教育委員会 1983『三新田遺跡発掘調査報告書』
 富士市教育委員会 1996『舟久保遺跡—第20・21・33・34地区発掘調査報告書』
 富士市教育委員会 2001『東平遺跡—第28地区発掘調査報告書』
 富士市教育委員会 2003『東平遺跡発掘調査報告書—第4・23・24・30・31・32地区』
 富士市教育委員会 2004『中桁遺跡—王子板紙株式会社富士工場製品倉庫新築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
 富士市教育委員会 2008『祢宜ノ前遺跡—市立吉原商業高等学校屋内運動場改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
 富士市教育委員会 2008『宮添遺跡Ⅰ—個人農地改良工事に伴う宮添遺跡K地区埋蔵文化財発掘調査報告書』
 富士市教育委員会 2009『東平遺跡—葬祭場建設工事に伴う東平遺跡第37地区4次調査埋蔵文化財発掘調査報告書』
 富士市教育委員会 2009『宮添遺跡Ⅲ—個人農地改良工事に伴う宮添遺跡D地区埋蔵文化財発掘調査報告書』